http://decfamily.p1.bindsite.jp/2017/

We 25R

No.314　17/12/20

男女別学、なぜ関東に多い？

ちょっと前になるのだが、面白い記事があったので紹介しよう。（朝日新聞９月5日）

＊

「個人的には西の方の出身なのでびっくり……」。広島市出身の小松弥生・埼玉県教育長が記者会見で驚いた表情を見せたのは、公立高が男子校と女子校に分かれる「男女別学」だった。全国的には「絶滅危惧種」だが、関東の一部を中心に残る。なぜなのか。

「いろんな学校がある中、別学という選択肢があってもいい。社会に不都合や問題を起こしているわけでもない」。1895年創立の男子校、埼玉県立浦和高の藤野龍宏・同窓会事務局長（65）は共学化に反対だ。茨城県古河市までの約50キロを７時間以内で走る「強歩大会」や臨海学校での遠泳など、長く続く伝統行事が多い。藤野さんは「共学化で伝統行事が続けられるのか。『らしさ』が失われるのが心配だ」と話す。

一方、亀田温子・十文字学園女子大名誉教授（ジェンダーと教育）は「建学の精神に基づく私立と違い、公の制度である公立高が性別を理由に入学資格を与えないことは社会的公正さを欠く。男女別学が残ることは、多様性を認め合う力が必要とされるこれからの社会に適するのか」と疑問を呈する。

共学化を求める大学教授らのグループ「関東三県男女共学推進ネットワーク」によると、公立高（全日制）の中で、男子校と女子校が占める割合を示した「別学率」が2016年度で最も高いのは、群馬県で23.5％（16校）。続いて栃木県18.6％（11校）、埼玉県8.5％（12校）と関東の３県がトップ３だ。少子化の影響で共学化も一部進むが、進学校を中心に別学が残っている。

そもそも、別学はなぜ始まったのか。亀田名誉教授によると、戦前はエリートを育てる男子校、良妻賢母を育てる女子校と役割が分かれ、別学が当然だったという。だが、終戦後の1947年に、教育での男女平等と男女共学が明記された教育基本法が施行され、連合国軍総司令部（GHQ）が「教育の民主化」の一環として高校の共学化を後押しした。60年度には共学化率が87.0％に上ったが、当時の文部省が「地域の実情に応じて進める」との方針を示したこともあり、地域によって差が出た。

特に、関東地方に別学が多い理由について、群馬県立女子大群馬学センターの熊倉浩靖教授は「幕末から明治期に掛けて養蚕業が盛んだったためではないか」とみる。群馬県を中心に関東北部では世界遺産に登録された富岡製糸場（群馬県富岡市）のほか、多くの養蚕、製糸業の施設が作られ、産業を支えたのが女性労働者だった。職場でのリーダーも育てるため、他地域に先駆けて女子校が開校。日本最古の公立女子高である宇都宮女子高校も１８７５年に創設されている。関東の３県では別学校がすでに長い伝統を築き、地域に根ざしていたため、そのまま残ったとみる。

最近では、男女別学が残っていた福島県で2003年度、宮城県では10年度までに全ての県立高が共学になった。文部科学省によると、16年度では全国に3589校ある公立高のうち、98.6％の学校で男女が共に学んでいる。熊倉教授は「関東の一部は当時、女性の教育が進んだ先進的な地域だったからこそ、逆に別学校が強く残った面もあるのではないか」と指摘する。

＊

男女別学、みなさん、どう思いますか？